

中村光夫全集

第十卷

筑摩書房

中村光夫全集 第十卷
昭和四十七年六月二十五日発行

著者 中村光夫

発行者 井上達三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一一九一
電話 東京例 七六五二(代表)
振替 東京 四一 二二三
印刷 株式会社 精興社
製本 牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72510 (出版社) 4604

第十卷目次

二十世紀の小説

「チボオ家」	4
デュ・ガアルとジイド	17
「贖金づくり」	49
ボオドレエルとフロオベル	74
ヴァレレイとフロオベル	96
笑ひの喪失	107
後記	144
アンドレ・ジイド	
「背徳者」	146
ジイドへの手紙	152
ポオル・ヴァレレイ	

「ドガに就て」……………	160
「女性フェードル」……………	169
「作家論」……………	170
ヴァレリーの印象……………	174
アルペエル・カミュ	
異邦人論……………	178
「カミュ会見記」を読んで……………	221
アフリカ育ち……………	223
カミュの提出した問題……………	226
カミュにおける肉体と自然……………	231
スタンダール	
「パンセ」をよんで……………	242
ジュリアン・ソレルと現代……………	247
「アルマンズ」ほか……………	275

「ヴィヨン全詩集」	303
「マノン・レスコオ」	310
「アドルフ」	313
「カルメン」	315
「椿姫」	317
小詩人	319
「フランス文化論」	321
「愛の哲学」	325
三つのフランス戯曲	333
シャルドンヌの遺著	356
「アンチゴネー」	369
「ソクラテスの弁明」	371
「神々の対話」ほか	374
姦通と文学	288

「ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯」	377
「ドン・キホーテ」	383
「ファウスト」	397
「桜の園」	407
古典主義	410
十九世紀後半の芸術思潮	417
フランス批評文学	428
自然主義	450
自然主義の文学運動	453
写実主義Ⅰ	487
写実主義Ⅱ	508
資料	517
解説	535
市原豊太	
解題	547

二十世紀の小説

二十世紀の小説

「チボオ家」

戦争中福永武彦氏の好意で「チボオ家」の終りの部分を読みました。考へて見るともう一昨年秋のことです。しかしこれほど面白い小説は滅多に読んだことはないし、その感想をいつか書きたいと思つてゐたので、この機会にまとめて見ることにします。

周知のやうに、この小説の結末をなす第七篇と第八篇とは、これまで日本では翻訳を許されなかつたものです。そして終戦後、いちはやく、前半の訳者である山内義雄氏がその紹介に着手したやうですが、現在の出版事情から見て、この四冊が出揃ふのはまだかなり先のことと思はれるので、まづその内容を簡単に略記しておきます。

第七篇の標題は「一九一四年夏」です。これはちやうど僕等にとつて、昭和十六年の冬とか、大正十二年九月とかいふのと同じやうに、いやそれ以上に、ヨーロッパ人全体に、忘れられぬ年の忘れられぬ夏でせう。

この年の七月末から八月にかけて第一次歐洲大戦が勃発しました。普仏戦争以来、五十年に近い平和を樂しみ、文化、産業、軍備などすべての面で世界に冠絶する地位を誇つて来た十九世紀の歐洲が、今日の窮乏と混乱への第一歩を踏みだした運命の転回点であり、巨大な文化の悲劇の開幕の年であつたのです。

フランスはこの戦争によつて幾百万の有為な青年を「鎌でなぎたふされた世代」として戦場に失つたのみでなく、その文化の基盤をなしたさまざまな精神的価値を、根柢から揺ぶる幾多の予想に絶した新事態を悲痛の眼で眺めねばなりませんでした。

したがつて、戦後の（今日から見れば第一次大戦と第二次大戦との間を挟む二十年間の）フランス文学はすべてこの未曾有の悲劇に傷いた精神の痙攣的な発現か、またはそこから再び自信と安定をとりもどさうとする必死

の努力の現はれと見られるのですが、かうした大戦の創痕は、このデュ・ガアルの長篇にもはつきりと現はれてゐます。

この十一巻の小説が、「一九一八年十月三十日衛戍病院に於て、死が君の至純にして悩める心の中に熟しつゝあつた逞しい作品を毀ち去つた」或る親友に捧げられてゐるのでも明かなやうに、悲惨な戦線の生活から、辛うじて生を全うして戦後に生き残つた作者が本当に描きたかつたのは、この未曾有の残虐な殺戮にその青春と生命を破壊された、所謂「一九一四年の世代」の破壊の叙事詩であらうと思はれます。これはちやうどフロオベルが「凡庸の叙事詩」たる「感情教育」によつて、一八四八年の革命を境として滅びた己れの世代の青春を描いたのと遙かに通ふ、フランス小説家の伝統的意欲でせう。おそらくこの冷静な客観小説の背後には、この理不尽な暴力によつて傷けられた自己の青春に、またはそこに夢と将来を破壊されて終つた多くの同年の友の生命についての、無言の憤怒の激しい火が、作者の胸に燃えてゐるのです。現在のフランス文壇稀に見る才人である彼が、半生をこの大作に捧げて悔いなかつた理由もおそらくここにあるのでせう。或る種の優れた作家の心には、その青春が生涯にわたつて生きるやうに、大戦の創痕は二十年の後まで、生々しく作者の胸裡にうづいてゐます。

しかし彼はここでその傷口を人目につくやうに押し開いて、安手な抗議などを提出してゐるのではありません。事態の悲劇性を熟知する者にとつて、このやうなロマンチックな反抗は無意味だからです。彼はただここで事柄の成行を冷静に注意し、これを正確に表現してゐるだけです。この運命的な瞬間に、彼等の世代の演じた悲劇の性格を誇張なく浮彫にすることを希つてゐるだけです。

「冷静な解剖こそ人生への復讐だ。」といふフロオベルの言葉は、おそらく彼にとつても箴言でした。作者自身が語るよりむしろ事件そのものに語らせること、このフランス写実主義の伝統を彼もまた潔癖に守つてゐます。

しかしこの外観上の無私の背後に、僕等は単にこの小説の主人公達の悲惨な末路に対してのみでなく、ひいてヨーロッパ自体の運命に対する作者の深い傷心を、生き生きと感ずることができます。言葉をかへて云へば作者がこの小説を書いた目的は大戦といふ事件をひとつの悲劇に高めることでした。ここに縦横に駆使された完璧な

リアリズムの技法は、おそらくこの悲劇作者が現代に生きるための必須な仮面にすぎません。そしてすべて優れた悲劇がさうであるやうに、作者の心情はここに登場するあらゆる人物と共に鼓動し、彼等の上に蔽ひかぶさる暗い運命に対する作者の無言の凝視は、そのまま或る生きた視線として読者の心を貫きます。

もしさうでなければ、この砲声ひとつ聞えぬ戦争小説が、ことにその第八篇のエピローグが、戦争が人類にもたらす悲惨について、これほど徹底した暗い感銘を与へる筈はありません。

したがつて「一九一四年夏」の一篇は、この十巻にあまる長篇小説の眼目をなす部分です。おそらく主人公の少年時代から忍耐強い筆を運んで来た作者が、全篇を通じて一番書きたかつたところは、この運命的な夏の一月であり、この篇が量の上でも他のすべてを凌駕するばかりでなく、その特異な力の籠つた構成で文字通り圧巻の趣をなしてゐるのもこのためです。

いはばそれは悲劇の第五幕であり、これまでときとして美しい牧歌を交へながら、悠々たる大河のやうな歩みをつけて来たチボオ一家の生活は、ここでは急潭の決する勢で大戦の深淵に巻き込まれて行きます。

この小説のふたりの主人公であるアントアーヌとジャックは、ちやうど縋ひ合せた繩のやうにかはるがはる前面に登場しますが、この第七篇ではジャックが最も主要な人物であり、兄のアントアーヌはいはば脇役にまはつてゐます。

そして社会主義者になつてスイスにゐたジャックが、大戦勃発の危機に際して、若い純潔な熱情を傾けて無力な反戦運動を試み、開戦後間もなくスイスから飛行機に乗つて、西部戦線に反戦ビラを撒くことを企て、遂に悲惨な横死を遂げるのがこの篇の骨子ですが、作者の卓抜な手腕は、このいはば自己の想像力と純潔な心情の犠牲者である二十歳の思想家が、複雑な国際社会主義運動の波に翻弄され、事態の成行に歩一步失望して、遂にその良心の「満足」を図るために自殺的な輕拳に走るまでの過程を、はつきりと肉体を持つ青年の心理として、明確

に描きだしてゐるだけでなく、この常に人類の将来を夢見る「新しいミスチック」と反対に、よくもわるくも徹底した個人主義者であり、伶俐な現実家として生活の享樂と仕事に熱中する兄アントアーヌも、緒につきかけた未来の美しい計画をすべて抛つて、大戦の恐しい渦に捲き込まれて行く有様を、おそらくフランスの作家にも稀に見る幅の広い筆力で描き、サラエヴォ事件からジョーオレスの暗殺にいたるまで、あらゆる政治的事件を大胆に組みこんで、避け難い文明のメカニズムの最後の破局に、喘ぎながら陥つて行く歐洲の姿を、特に開戦前夜のパリの息苦しい雰囲気を、あたかも壮大な壁画のやうに構成することに成功してゐるのです。

この点から見ればこの小説の主人公は、ここでは戦争そのものと云へます。または自ら欲せぬ破滅の淵に、いはば運命の輪で追ひ込まれて行くパリの、そして歐洲の悲劇だとも云へます。ジャックもアントアーヌも、この巨大な火輪の周囲で、盲目に飛び交ふ二匹の蛾にすぎません。歴史の激流に押し流されるとき、これに対する個人の力などいかに微小なものか、おそらくここに作者のペシミズムの独自の形式があります。ジャックの熱烈な善意もアントアーヌの聡明な個人主義も、一旦この渦に捲き込まれば、ともに死を見出すだけです。しかも無意味な死を見出すだけです。これが我々の世代の宿命であり、また戦争の実相なのだと言ひたさうです。

「一九一四年夏」になると、今までチボオ一家に対する反抗兎にすぎなかつたジャックも、すつかり社会への反抗兎に成長します。彼は今ではジュネーヴで、ジャーナリストとして独立の生計を立て、各国からの亡命者と親密に交つてゐます。彼は或る友人が批評したやうに「本当の革命家」ではないかもしれませんが、しかし「何物より戦争を罪惡」と信じ、流血の惨事を防ぐためには革命すら内乱を伴はぬことを好ましいと考へる熱烈な人道主義者である彼は、信念の上では社会主義者であり、その純真な心情と濃厚な人柄で多くの人々から親しみと敬愛をうけてゐます。

そしてサラエヴォのオーストリア皇太子暗殺事件の直後に、各種の情勢から戦争の危機を予感し、これを防ぐためには各国の労働者の団結を急務と信じた彼は、それに挺身するために、従來の孤立的態度を一擲して、社会

民主党に入党し、スイスからの使命を帯びてパリに現はれ、父の旧宅に兄のアントアーヌを訪ねます。丁度七月十九日のことです。彼が幼時を過した昔の家は、アントアーヌの手で大胆に近代的に改装され、父の遺産を継いだアントアーヌは、そこに研究の設備などもして、才能と財産に恵まれた若い医者として、輝く生涯の第一歩を踏みださうとしてゐます。弟が何の前触れもなしに現はれたとき、彼はちやうど恋人のアンヌと媾曳に出掛けるところでしたが、それでも機嫌よく弟を夕食にひきとめます。

しかし兄の自足した幸福さうな態度は、父の死後見違へるばかりになつたその贅沢な生活とともに、いちいちジャックの疝にさひります。

そして父の葬式以来初めて会つた兄弟は、互に親しまうとする真摯な心は持ちながら、会話はすすめばすすむほど、ふたりの生活感情の隔りを露骨にするだけです。ジャックは迫つて来る戦争の危険や、それを機として勃発する筈の革命や、インターナショナルの組織や労働者の将来についての理想を熱心に話しますが、アントアーヌはただ自分の仕事と地位に満足した専門家が、貧乏な不平家のユートピアを聞くときの儀礼的な興味を示かしてしません。ジャックはこれに気付いて、兄への反感を強めるとともに、自分自身の未熟にも腹を立てます。重苦しい晚餐も終りに近づいたとき、突然ベルが鳴つて、ジャックの昔の恋人ジュエンニイが姿を現はして、父のジェローム・フォンタナンがホテルで自殺を図り、重傷を負つたことを告げます。アントアーヌは一瞬のうちに身支度をして、自分の自動車にジャックとジュエンニイを乗せて、そのホテルにでかけます。四年前ジャックの突然の家出で手酷く傷けられたジュエンニイは、顔を硬ばらせたままジャックに口を利かうともしません。ジャックも思ひがけない過去の亡霊の出現にただ狼狽します。しかし彼は、アントアーヌが瀕死のジェロームを病院に運ぶの手伝ふ間に、何か得態の知れぬ新しいものが心に生じたのに漠然と気圧され、本能的な警戒心からパリの滞在を早くきりあげて、翌日ジュネーヴにかへる決心をします。そして東部国境の兵營にゐる友人のダニエルに父の危篤を知らせる電報を打ちに夜中の街を歩いてゐるうちに、もはやつきまといつて離れぬ「戦争」の懸念がふたた

彼の頭腦を占めてしまひます。この危機に當つて、国境守備兵であるダニエルは容易く休暇が得られるであらうか。……しかしバリの街はまだ全く平靜で、何も知らぬ芝居帰りの群衆は呑気に夏の夜を楽しんでゐます。ジャックは不思議な孤独感に悩まされ、社会党の機関紙「ユマニテ」の編輯部に顔をだし、そこで各国の労働者が戦争に反対して行ふ筈の、國際的ゼネラルストライキの計画などに耳を傾けて元氣を恢復します。

一旦スイスに歸つた彼は、再び使命を帯びてパリに来ます。その使命を託されたとき、彼は何か良心の重荷を除かれたやうな歎びを感じますが、それがジュンニイへの恋のためとは自分でも氣付きません。

しかしフォンタナン家の葬儀が行はれた七月二十五日のパリは、もはや五日前のパリではなくなります。オーストリアがセルビアに突きつけた最後通牒の内容が明かになるにつれ、またこの兩國の紛争に対するイギリスとドイツの態度の相違がはつきりして来るにつれ、更にはほとんど降服に等しいセルビアの回答に、オーストリアが不満の意を表明したとき、戦争はもはや誰の眼にも避け難い危険として、突然人々の眼前に現はれます。昨日までカイヨー訴訟事件と夏休みの計画に氣をとられてゐたパリ人たちは、もはや事態は彼等の馴れつこになつた「外交的緊張」と全く違つた性質のものであることを、厭でも悟らされます。この思ひがけない破局の前にして、対象のはつきり定まらぬ憤怒と昂奮の渦に捲き込まれて行きます。仕事と恋愛のほか何にも興味の無いアントアースも、仕舞ひ忘れてゐた軍隊手帳をだして、動員のとき入隊すべき場所と日限を確めます。

父の葬儀の日で休暇のきれるダニエルも、もはや十月に除隊になる楽しみを口にせず、破産に瀕した母と妹をおいて、東部国境に歸つて行きます。そのなかで一番落着いてゐるのはインターナショナルの力で戦争を防ぎ、これをすぐにも革命に変じ得ることを信じてゐるジャックです。

彼はジュンニイの妄想を追ひ払ふために、できるだけ力を尽しますが、つひに氣付かぬ間に心に根を張つてしまつた恋に打負され、ダニエルを停車場に送つたかへりに、やはり兄を送つて来たジュンニイを追ひかけて、ほとんど無理矢理に彼女を捕へて心を打明けます。この氣難かしい二人の恋人たちは、同じやうな孤独、同じ空しい青春の闘ひに、内心疲はれてゐました。しかし遂に時が来て、彼等は「まるで暗黒な力の前に降服するやう

に」その恋愛を成就します。この夜から戦争の始まるまでわづか数日の間、恋と革命の理想に渾身の力で生き得たことが、短いジャックの生涯を彩る唯一の幸福でした。

しかし事態の進行は、日一日とジャックの期待を裏切つて行きます。七月二十七日にパリとベルリンで行はれた労働者の戦争反対の示威も、ブリュッセルで開かれたインターナショナルの大会も、すべてこの抗ひ難い大勢を阻止するには全く無力です。口先では平和を唱へながら、一步一步巧妙に戦備を整へ、輿論を刺戟して、国民を流血の死地に追ひ込む支配政治家の策略、それに盲目な愛国心を煽られて、あたかも屠殺場に赴く羊の群のやうに、追従する無気力な大衆、情勢の切迫とともに社会党の指導者の間に漸く著しくなつた動揺と変節など、事毎に彼を苛立たせます。

差し迫つて来る嵐を予感する家畜の群のやうに、もはや誰も彼も戦争の話をしなくなつたパリの街を背景に、彼は日に数回「ユマニテ」の編輯室でニュースを聞き、社会党や労働組合の闘士と連絡をとり、会合や街頭デモに参加し、秘密の使命を帯びてベルリンに行き、ジュンニイを連れて演説会に行くなど、恋と革命の理想にかざされて熱病患者のやうな日々を送ります。しかし七月三十一日には、遂に彼の偶像であつたジョオレスは彼の眼前で暗殺され、八月一日には総動員令が公布され、翌日兄のアントアーヌも出発します。あくまで兵役に服することを肯んぜぬジャックは、その前夜この頑固な信念とジュンニイとの恋愛のことで、兄と激しく口論します。しかし翌朝解けぬ心のまま、入營する兄を送つた彼は、骨の髄から個人主義者で享樂家の兄が、その美しい未来を抛つて、無造作に停車場の群集に姿を隠すのを見て或る感動を禁じ得ません。彼に残された道はただひとつ、戦場に戦ふ兵士と同様に生命を賭して戦争と闘ふことです。突然ある計画が彼の熱した頭に閃きます。これを早急に実現するために、彼は偽の旅券で閉鎖された国境を潜つて、スイスに脱出します。

そこで彼は飛行機から反戦ビラを西部戦線に撒布する計画を、ジュネーヴで彼の指導者であつたメネイストレルに打明けて、その助力を求めます。かつて飛行士であつたメネイストレルは、これがおそらく何の効果も生まぬ暴挙にすぎぬことをはつきり知つてゐますが、ジャックとは別の意味で人生に絶望してゐた彼は、ただ死場所